

博士論文の要約

氏 名 花上 和広

論文題目 院政期和歌史の研究—藤原師実・師通父子を中心に—

『院政期和歌史の研究—藤原師実・師通父子を中心に—』と題した本論文の目的は、白河院政期の藤原師実・師通父子の詠歌ならびにその周辺人物（源顕房、源経信、郁芳門院安芸）の和歌活動の諸相を究明し、従来あまり顧みられなかった過渡期の和歌活動がどのように行われたかを考察するとともに、これまで対立関係ばかりが強調されていた院政期の天皇家と摂関家の関係について、和歌活動を通じて再考し、王朝和歌から中世和歌への展開の一端を明らかにすることである。

本論文が目指す王朝和歌から中世和歌への展開を解明するには、白河院政期の和歌活動を明らかにしていくことが重要である。というのは、白河院政以前の頼通の時代については、近年、和歌をはじめ物語や周辺領域の研究が盛んになってきたが、続く師実・師通の時代については、まだ十分とはいえず、この空白を埋め中世和歌への変容の過程を把握する必要があるからである。

ここで簡略ながら白河院政期の政治的動向について振り返っておきたい。史学の成果によれば、藤原氏を外戚に持たない後三条天皇が親政を開始した。その後、白河天皇も父後三条天皇の親政を推し進め、白河天皇は近臣を重用し、摂関家への抑圧を図ろうとしたとされる。このような研究の影響をうけて、従来、白河院政期の和歌史研究については、摂関家と天皇家との対立を軸として論じられることが多かった。しかしながら、藤原師実の詠歌などを見ると、対立軸だけでは解せない歌も多く存するので、対立ばかりでなく融和的側面からの視点で考察するなどのアプローチが必要であると考えられる。というのも、院政期和歌研究の立場からすれば、天皇家、摂関家の親和的な和歌活動にこそ、文芸性を確立する中世和歌のはじまりとしての和歌史的意義が見出せると考えられるからである。

さて、院政期の和歌活動について研究史的に見てみると、先ず、橋本不美男氏『院政期の歌壇史研究』（武蔵野書院 1996年）があげられる。堀河歌壇を中心に記述され、その歌壇の指導者、中心人物としての基俊・俊頼・国信らを対象として分析的に究明し、歌壇という場の構造的分析とその位置づけをしたものである。以後の歌壇史研究の指標となった。そのほか、井上宗雄氏の『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院 1978年初版）がある。多くの和歌資料や史料に目を配った労作であり、以後の伝記研究に大きな影響を与えた。また、上野理氏『後拾遺集前後』（笠間書院 1978年）は、これらの研究の上に院政期の事象ならびに歌人、歌壇というように、院政期和歌史について正面から取り組んだ労作であり、以後の和歌史研究に多大な影響を及ぼした一冊である。

これらの業績を越えるのはなかなか至難のわざであろうが、院政期の政治史（特に白河院政期）の見方については、天皇家と摂関家の対立という二極化を全面に押し出して論を進めているので、この点は、修正が必要であろう。近年の中世史の院政期研究の成果によれば、白河院政期の天皇家と摂関家は、融和的な関係であったことが示されている。むろ

ん、中世史の政治史研究を和歌史研究にそのまま援用するのわけにはいかないが、隣接科学の情報として適切に引用することも必要なことである。

以上の研究動向を踏まえ、改めてその立場を表明すれば、本論文は、歴史学の成果を踏まえながらも和歌活動を中心に据えて白河院政期の諸相を明らかにし、院政期和歌史の一端を明らかにするものである。

研究を進める方法は、和歌一首一首を丹念に読む、注釈的な方法を用いる。特に歌の詠まれた場、詠作年次、同時詠の有無、交友関係について、史料も十分に活用し、また真偽のほどに注意を払いつつ「この歌はどういう歌なのか」「どういう意味があるのか」を問いながら考察を進める。

本論文は、二部からなり、第一部は藤原師実（1042～1102、頼通男、従一位摂政関白、『後拾遺集』以下の勅撰集に十六首入集、家集あり）とその息師通（1062～1099、師実男、従一位関白内大臣、『後拾遺集』以下の勅撰集に五首入集）の和歌活動を中心に述べた。第二部は、師実・師通の周辺歌人であり、二人の和歌活動に大きく関わった村上源氏の源頭房（1037～1094、師房二男、従一位右大臣、『後拾遺集』以下の勅撰に十四首入集）、ならびに歌人として当代第一と言われた源経信（1016～1097、道方六男、正二位大納言、『後拾遺集』以下の勅撰歌人、家集あり）、また郁芳門院媞子内親王（白河天皇第一皇女、母藤原賢子〔藤原師実養女、実父源頭房〕）に仕えた郁芳門院安芸（藤原忠俊女で後に康資王母養女となる。『金葉集』以下の勅撰集に十三首入集、家集あり）の和歌活動について考察した。

以下、各章で明らかになったことを述べる。

第一部第一章「藤原師実の和歌」は、師実集断簡（『師実集Ⅰ』）をはじめ、勅撰集・私撰集・私家集・散文・古記録等から拾い出した師実の詠歌三十四首について、一首一首、詠まれた場や詠作年次また同時詠、交友関係等を明らかにした。師実は、白河院との贈答をはじめ、内裏での歌会への出詠もあり、また後冷泉天皇皇后寛子に仕える女房との贈答、斎院（令子内親王、師実孫）における詠等、様々な場において、関白などその立場で、歌を詠んでいる。天皇家と摂関家との交流も多く見られたことを述べた。

第二章『京極大殿御集』の研究 付、他出文献一覧は、新出した師実集の完本『京極大殿御集』（『師実集Ⅱ』）により、新出歌、登場人物、歌の配列の問題等を考察した。家集の性格としてわかったことは、集は他撰家集であり、歌の配列において多少詠作年次が前後している歌もあるが全体的にはほぼ年代順に歌は配置されているということ、人物の呼称は家集編纂時の呼称であるということ、などである。家集の刊行を契機に、家集の歌と家集以外の歌（第一部第一章で既出）の両者を対象にすることで、師実詠の全体をとらえることができ、師実の和歌活動がより鮮明になった。

第三章「藤原師通の和歌」は、師通の詠んだ和歌全十三首について一首ずつ、詠まれた場や詠作年次また同時詠、交友関係等の考察を通して、歌人としての師通の活動についてまとめたものである。三十八歳で亡くなったということもあり、師通は氏長者や関白といった立場の人の割には、他の人と比べてその折々の行事での詠が少ない。歌を交わした人の多くは、父師実と共通しており、父の交友人物を引き継いでいたことが判明

した。本章の意義は、師通は詠歌も少ないが、今まで手つかずの歌人であり、院政期の和歌活動を検証する基礎資料としての価値に認められよう。

第二部第一章「源顕房の和歌」は、顕房の詠んだ和歌二十三首について、歌の集成と考証を行った。顕房は、当代の内大臣以上の歌人と比べて『後拾遺集』や『金葉集』に多く歌が採られている。それは顕房が白河院の舅であり、堀河天皇の外祖父であるという関係も影響しているだろう。顕房の和歌活動を通してみると、顕房は摂関家寄りの人物であるが天皇家とも極めて親しい関係を保っていることがわかり、両家の融和的關係を示す点で院政期和歌史における象徴的な歌人として評価できる。

第二章「歌合判者としての源顕房」は、顕房が判者を務めた「承暦二年四月廿八日内裏歌合」と「寛治七年五月五日郁芳門院根合」のそれぞれの判詞、並びに『袋草紙』『八雲御抄』『榮花物語』等に記された歌合に関わる顕房記事を検討することで、歌合判者としての顕房の活動について和歌史的な位置づけを試みたものである。院政期という、歌合が遊戯的なものから文芸性の高いものへと変わる転換期に、顕房は一方では歌合の伝統的な規範を守り、勝敗より左・右方の親和を保つことに重きを置くとともに、他方では和歌の文芸性を高めるために論難する場を設ける、という二つの面を合わせ持つ判者であった。まさしく顕房は王朝和歌から中世和歌への橋渡しの役目を担ったといえる。

第三章「源経信の和歌活動」は、経信と摂関家（藤原師実、師通父子）との関わりについて、贈答歌・歌会・歌合等の歌を通して、考察をしたものである。経信・俊頼父子は、師実やその北の方である麗子より「絵序」や「歌絵」の作成を何度も依頼されたり、摂関家主催の歌会に父子揃って参加したりするなど、摂関家と私的にも深い繋がりを持っていた。また経信と師実は管絃者としても関わりがあった。経信は摂関家の御遊などにも進んで参加しているように、経信の和歌活動は、摂関家への積極的な働きかけの中で行われていた。

第四章「郁芳門院安芸とその周辺」は、郁芳門院安芸の伝記考証をしたものである。特に康資王母と具体的にどういう関係であるか明らかにし、さらに安芸周辺の人物についても考証した。最後に、勅撰歌人には郁芳門院安芸と待賢門院安芸という二人が存在し、同人説・別人説があるが、安芸の誕生年次から、別人説を主張した。安芸は天皇家と摂関家両家に関係する人物であった。

以上、師実・師通とその周辺の歌人の活動をみてきた。師実は関白などその立場で、従前のようにその場に依じた詠作をするとともに、「高陽院七番歌合」の主催など、この期の歌人たちを支えた。その中で、顕房や経信などの中世和歌への橋渡しをする人物も現れてきた。この点に中世和歌への萌芽の一端がうかがえる。特に顕房は、今までの研究では歌合判者としての評価は低かった。大いに再評価すべきであろう。

この時代は、天皇家と摂関家は対立していることを前提に和歌事象が捉えられてきた。しかしながら両家に村上源氏も加わり、実際は互いに血縁関係があり、上記の和歌活動における交流からも、融和的な和歌活動が行われてきたといえる。この点に従来の院政期和

歌史の理解を改め、融和的であったことを研究史に加えることができる。